

黒羽芭蕉の館だより 23

「お昼の芭蕉講座」放送中です

市の広報FM番組「おたわらハートFM」(毎週月曜日正午〜12時49分)で、「お昼の芭蕉講座」というコーナーが始まりました。

リポーターの豊田あすかさんと当館学芸員新井敦史が対話しながら、松尾芭蕉の句のなかで、季節にぴったりの句や代表的な句を毎回一句ずつ紹介・解説しています。

今回は、放送された句をご紹介します。

【第1回】(平成24年11月26日放送)

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也

季語は「初しぐれ」(その冬の最初に降る通り雨)で、冬の句です。初時雨のなか、猿も私とともに旅したいのか、小蓑を欲しそうにしている、といった意味になります。

【第2回】(平成24年12月3日放送)

鞍壺に小坊主乗るや大根引

季語は「大根引」(大根の収穫作業)で、冬の句。句意は、両親たちが大根を引き抜く傍らで、馬の鞍壺に小さな男の子がちよこんと乗っかっている、となります。芭蕉が晩年に提唱した「かるみ」という俳諧理念に則った秀作です。

【第3回】(平成24年12月10日放送)

行春や鳥啼魚の目は泪

「行春」が季語となった春の句で、惜春の句であるとともに、「おくのほそ道」の旅立ちに際しての惜別の句でもあります。

【第4回】(平成24年12月17日放送)

夢よりも現の鷹ぞ頼母しき

季語は「鷹」で、冬の句です。句意は、めでたいとされる鷹の夢よりも実際に見た鷹の方がはるかに頼もしい、となり、門人杜国と再会できた喜びに溢れています。

当コーナーは3月頃まで続く予定です。ぜひお聞きください。



リポーターの豊田あすかさん(左)と新井学芸員(右)

問い合わせ 黒羽芭蕉の館

TEL (54) 4151

彫刻

市内で作られた作品とその作者

周遊 48

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介しま

す。この作品は川西小学校の生徒用昇降口前に設置してあります。

やや高めの寸法で作られた台座の中心には、まるで木のように柔らかい質感の四角い柱がたっており、その柱の対角線上に少女と犬の像がいます。少女と犬はそれぞれが柱を中心に回っているかのように見えます。



作者はこの作品に対するコメントをこのように残していま

柱

うちだ みつる 内田 充 日本 2012年

す。「廻る 廻る みんなも廻る」。この作品における『柱』は少女と犬の中心であり、世界の中心であり、万物の中心を表現したものだと思われま



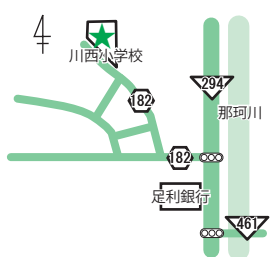
内田 充氏

同様に少女と犬も万物の象徴であり、この作品は、世界中のあらゆるものは、何かを中心に廻っている(動いている)ということ

を表現したものだと思われま

作者は栃木県生まれの内田充氏。栃木県彫刻造形協会会員。多摩美術大学大学院を修了。神奈川県相模原市の市立内出中学校25周年記念モニュメントの制作や、小田原市の蓮華仏龕阿弥陀如来像制作など、多種の作品制作に携わり、東京や神奈川県などで個展も開催しています。

設置場所案内図(★印)



問い合わせ

文化振興課文化振興係 TEL (23) 8718